フィールド・ホーム・バーチャル

──モンゴルのツァガーン・サル，1998 年～2019 年──

風 戸 真 理*

1998 年 2 月 27 日，修士課程の長期調査でモンゴルの牧畜地域に住み始めて 9ヵ月目に私は初めての「ツァガーン・サル」（*Tsagaan Sar*）を迎えた．モンゴル語のツァガーン・サルは「白い月」と訳せ，モンゴル暦[1]の「春の 最初の月の 新の一日目」つまり日本でいう「元日」とそれに続く時期を指す．

モンゴルの年越し儀礼は「ビトゥーン」とよばれる大晦日と「シン・ジル」とよばれる新年を区切るものである．大晦日の日没後に遊牧民は，一緒にキャンプしている他の世帯を一軒ずつ訪ねて「バンシタイ・ツァイ」（肉餃子の乳茶煮）をふるまわれ，また自宅に隣人を迎えて同じ料理でもてなす．元日には，ふだんどおりに起床して雌ウシの搾乳やヒツジ・ヤギの放牧をするかたわら，若い夫婦は両親をはじめとする年長親族を徒歩・騎乗・牛車[2]で訪問し，年始の挨拶をして贈り物を渡す．テーブルには天日干し乳製品（アーロール）や小麦粉の巨大な揚げ菓子（ヘヴィーン・ボーウ）が高く積まれて盛りつけられ，ヒツジの全身を大きく切り分けて蒸した「オーツ」が飾られている．ホストがオーツの肉をナイフで削りとってくれるのをゲストは両手で受けとって味わう．そして前夜の肉餃子を今度は水で蒸し上げた「ボーズ」と，牛乳などを材料とした自家蒸留酒でもてなされる．

1997 年 4 月から 1999 年 3 月に，私は京都大学大学院人間・環境学研究科の修士課程に在籍しながら平和中島財団の留学奨学金を受けてモンゴル国立大学に 2 年間留学していた．1 年目には，首都ウランバートルから約 650 km 離れたアルハンガイ県チョロート郡バヤン・ハイルハン行政区の牧畜世帯に住みこんで寝食を共にしながら家畜管理の技法と遊牧民の社会関係のあり方を調査した．

ハイルハン行政区の遊牧民は家畜の食草や子どもの通学などを理由に年に 4～10 回移動する．行政区内には 1998 年 3～4 月現在約 160 世帯があり，一緒にキャンプする世帯の集まりである「居住集団」は 1～7 世帯（平均 4.3 世帯）で構成されていた．居住集団の構成は日々変化するが，1997 年 9～10 月に見られた居住集団は約 30 であった．私は 2 年間に 83 の居住集団の構成メンバーの

* 北星学園大学

1）モンゴル暦はモンゴル独自の陰暦で，年の始まりはグレゴリオ暦の 1～2 月にあたり，日本の旧正月や中国の春節と同じ日の年も別の日の年もある．

2）ハイルハン行政区の「ウシ」にはヤクが多く含まれ，牛車などの荷役にはヤクとウシの雑種第 1 代やヤクが主に使われた．

親族関係を調査した．

実際にやったことは，ひとつずつゲルに入って夫婦2人の顔を見て自己紹介をし，日々の暮らしの様子とともに隣のゲルの構成員たちとの関係を尋ね，逆に問われて日本の生活を語り，最後に家族の写真をあらゆる組み合わせで撮影し，私も一緒に写真に写った．その後首都ウランバートルに出かけた折に写真を現像し，写真を持って同じゲルを再び訪ねて補足の聞き取りをする，その繰り返しであった．当時の私はモンゴル語があまりできず，草原には自身のことを外向けに説明するのに慣れた人が少なかったので，五感を駆使して挑む直接観察が調査の根幹となった．

ゲルに入ることは誰にでも許されていた．ゲルに入ってベッドやイスに座ると，室内の装飾や整頓の具合を見る．お茶と自家製の乳製品を手渡されて味わう．そして，私に話してくれること，家族どうしの会話，戸外のウシやヤギたちに投げかけられる「ハィッ！」という叫びを聞く．話しながらも作業を続ける人の手の動きをみつめながら．このように，直径6 mほどのゲル内空間で，半日ほどかけて進む会話とともに流れる時間を私は彼らと共有し，写真撮影時にはくっついて座ったり肩を組んだりすることで筋肉に触れ，匂いを感じた．これらを繰り返すゲル訪問調査はきわめて身体的な経験であった．

当時のハイルハン行政区には電気も電話もなかった．円形のゲル内ではすべてが丸見えで調査はしやすかったが，自分が身を隠す場所もなかった．湯浴みは，かまどで湯を沸かした後に家族全員にゲルから出てもらい隣の家で待っていてもらうのだが，湯が沸いた時に客が来たりしてなかなか成功しなかった．日本への連絡には，週1回行政区の中心地を通る「ショーダン」（郵便，写真1）とよばれる小型トラックの運転手に手紙を手渡した．このように1990年代のモンゴル遊牧民調査は文字どおり「地を這うような」調査であった．

2010年代になって一回り以上若い後輩がウランバートルからさらに離れた牧畜地域で長期調査をした．彼女は行政区よりも大きな「郡の中心地」を調査拠点としていたが，現地で携帯電話とパソコンを使っていて，私も電話やメールで彼女と連絡を取り合った．モンゴルの草原ではこの約20年の間にソーラーパネルによる自家発電が普及し，携帯電話の無線基地局が各郡の中心地にでき，インターネットの電波も送受信されるようになった[3)]．2019年1月現在，ウランバートルな

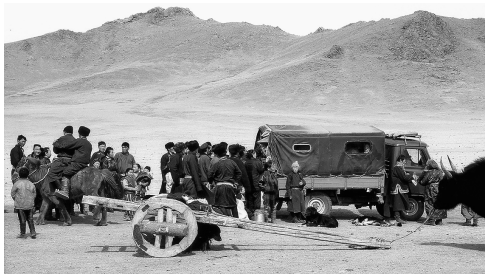

写真1　草原の通信網「ショーダン」
ウマや牛車で駆けつけ人と荷を限界まで載せる
（モンゴル国アルハンガイ県，1998年）

3）モンゴル国の通信事情およびFacebook利用の詳細については別稿を参照されたい［風戸 印刷中］．

どの都市および全国の県や郡の中心地には携帯電話およびインターネットの無線基地局があり，人びとはスマートフォンで，モンゴルの国民的ソーシャルメディアであるFacebook を利用している．電波の届かない草原に暮らす遊牧民もアカウントを作ったり，都市に進学した子どもを通して日本にいる私と連絡を取り合う．

2018 年 2 月 16 日，私は自宅のある札幌でツァガーン・サルを迎えた．そして，その 1 週間後の 2 月 24 日に「北海道モンゴル交流協会」の伝統文化祭典に招かれた．この協会は北海道に住むモンゴル人の親睦会が母体となって，道内のビジネス交流等の窓口としても機能しているものである．会場となった札幌市苗穂本町地区センターの体育館に入ると約 10 人用のテーブル 5 卓に，ツァガーン・サルに欠かせないヒツジの肉，天日干し乳製品と揚げ菓子（写真 2），ボーズ，ウォッカに加えてケーキ，ハム，サラダ，チョコレート，ジュースなどが所狭しと並べられていた．

写真 2　札幌でのツァガーン・サルのテーブル
奥に天日干し乳製品と揚げ菓子のタワー，手前に内裏雛が描かれたケーキ（日本国札幌市, 2018 年）

ステージでは，司会者が独特な発声と節で祝詞を謡い，子どもたちがヒツジのくるぶし骨や木製のモンゴル知恵の輪でゲームをし，参加者が装うモンゴル服「デール」を評価する男性ファッションショーと女性ファッションショーなどがおこなわれた．フロアからは有志らがアカペラでモンゴル演歌を披露をした．最後に，ダンサーの指導で全員が輪になって手を繋ぎ，西洋風のステップを練習してから輪舞した．途中で「ビエルゲー！」（肩の動きが特徴的なモンゴル国西部の踊り）との指示が出て，全員がモンゴル伝統芸能にチャレンジしたが誰も上手にできなくて笑いながら閉会した．

この頃，Facebook のモンゴル語グループ「世界旅行者」（*Delhiigeer Ayalagchid, World Wanderers*）[4] では連日，世界各国に暮らすモンゴル人がそれぞれのツァガーン・サルの様子を写した写真を投稿していた．立派なモンゴル服と帽子で正装してケルン大聖堂の前に立つ家族や，アフガニスタンのモンゴル人会の祝宴テーブルに飾られたモンゴル国旗を描いた大きな四角いケーキなどに多くの「いいね！」とコメントがついた．

今年もまたツァガーン・サルが近づく．2019 年のツァガーン・サルは 2 月 5 日であ

4)「世界旅行者」はモンゴル国の総人口 318 万人の 18%にあたる 55 万人（2018 年 1 月現在）が参加している人気のモンゴル語グループである．

る．Facebook では 3 週間ほど前から，肉・天日干し乳製品や馬乳酒の個人間売買の広告，過去のツァガーン・サルでテーブルいっぱいに並べられたご馳走の写真，ボーズの皮を超速で伸ばす技術動画，ボーズ・メーカーのマーケティング調査など，ツァガーン・サルの準備の話題で盛りあがっている．私も職場から帰って自宅のパソコンを開くとツァガーン・サルの話題に引きこまれる．

Facebook にはふだんから，とくに地方の人たちは家族や親族の写真をよく投稿する。そして，そのような投稿に率先して「いいね！」をつけるのも近親者である．かつてゲルを一軒ずつ訪問して調査した親族関係が，今やパソコンの前に座りながらにして手にとるようにわかる．私が彼らの投稿を見るとき，ひとりひとりの声やしぐさが脳裏に再生される．ソーシャルメディア上での彼らのコミュニケーションを見るとき，その 2 人の間に過去に生起した具体的なトランザクションが思い出されて今に繋がる．

2018 年のツァガーン・サルには，モンゴルの友人たちが，新年を祝う詩・挨拶・グリーティングカード（画像やアニメーション）などを Facebook のメッセンジャー機能を使って私に送ってくれた．年中行事に限らず日常的にモンゴルからメッセージが届き，電話がかかり，さらにまったく知らないモンゴル人から日々「友達」申請が来る．この状況で，私の身体は札幌で日常生活を送りながらも，1 日のうちの何時間かをモンゴルで過ごしているような感覚を覚える．

地を這うような調査のなかで初めて迎えた 1998 年のツァガーン・サルの経験は私の身体に深く刻まれた．草原に通信テクノロジーが入るのと同時に，交通手段もウマ・牛車・ショーダンからバイク・自動車・定期バス（ウランバートルと地方を毎日数回往復）に変わり，「フィールド」と「ホーム」との行き来は約 20 年間で格段に楽になった．日本にいながらにしてモンゴル人のパーティーに招かれ，自宅にいながらにしてモンゴル人の新たな「友達」ができる．Facebook のテレビ電話で遊牧民の友人と雑談すると，私が彼らの暮らしを観察してきたように彼らも私の生活を映像と音声で把握する．バーチャルなモンゴル世界が，私の「今ここ」のリアル世界に浸透していると感じるが，私の遠隔的な「理解」はこれまでの 22 年間にモンゴルに通い，日本ではその経験を考えぬき，語り，書いてきた，その直接的な経験を通して少し身につけたいわば「モンゴル・センス」を基盤に成り立っているといえるだろう．

引　用　文　献

風戸真理．印刷中．「モンゴル国―人口 318 万人の Facebook 大国」田中樹・宮寄英寿・石本雄大編『フィールドで出会う風と人と土と 3』総合地球環境学研究所．